

報 告

集団生活に適応が困難な3歳児に関する保育士への質問紙調査

～地域保健と保育の連携による発達障害スクリーニングの予備的調査～

津田 芳見¹⁾, 橋本 俊顕²⁾, 高原 光恵³⁾

〔論文要旨〕

保育と連携した発達障害スクリーニングの予備的調査として保育士に3歳児の集団生活における適応状況に関する質問紙調査を行った。コミュニケーション, 社会性, 認知行動, 生活習慣などに関する25問からなり, 4段階尺度回答の「3歳児発達調査票」を作成し, 保育所3歳児205名を対象に調査した。保育士が担任児童について回答し, 同時に発達評価を行った。保育士が標準的な発達とした群は170名, 発達が気になるとした群は35名であった。回答点数の度数分布は, 2群間で顕著な差を認めた。2群間で総得点平均値において, また各設問平均値においても有意差を認め, 特に「集団行動がとれない」、「一人遊びが多い」、「一方的な会話」などで顕著であった。

Key words : 発達障害, 保育士, 集団生活, 適応困難, 3歳児

I. はじめに

発達障害者支援法施行後, 地域保健においても, 発達障害の早期発見は重要な課題となってきた。そのため, 問診に発達障害に関係した項目を加える, 健診の場において行動観察を取り入れるなど, 発達障害を視野に入れた乳幼児健診が行われるようになってきた。

発達障害, その中でも主要な広汎性発達障害に特徴とされる主な症状は, 対人的相互反応における質的障害, コミュニケーションの質的障害, 行動, 興味および活動の限定された反復的で常同的な様式などであり, 少なくとも1つは3歳以前に見られるとされている¹⁾。しかし, このような症状は, 家庭の中ではあまり目立た

ず, 同年齢児との集団生活を開始して始めて明らかになってくることが多い。つまり, 保育士には把握しやすいが保護者には的確に把握しにくい情報である。しかも, 現行の3歳児健康診査では, このような情報を保育士から直接的に入手できるシステムにはなっていない。

発達障害のスクリーニングとして, 3歳はkeyとなる時期と考えられる。その理由としては, 診断基準において3歳までに症状が見られるとされていること, 法制上乳幼児期において, 就学前では最終の健診として3歳児健康診査が定められていること, スクリーニングから診断介入支援には数か月以上の時間を要するため, 就学に向けての準備の時間を考慮すると3歳時に発見できることが望ましいことなどがあげら

A Questionnaire for Nursery Teachers Concerning Three-year-old Children's Difficulties During Nursery School
～ A Pilot Study for the Screening of Developmental Disorders in Cooperation between Public Health and Nursing ～

〔2028〕

受付 08. 3. 21

採用 09. 8. 11

Yoshimi TSUDA, Toshiaki HASHIMOTO, Mitue TAKAHARA

1) 鳴門教育大学大学院特別支援教育専攻 (小児科医師)

2) 徳島赤十字ひのみね総合療育センター (小児科医師)

3) 鳴門教育大学大学院特別支援教育専攻 (研究職)

別刷請求先: 津田芳見 鳴門教育大学 〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748番地

Tel/Fax : 088-687-6313

れる。

近年、働く女性の増加に伴い、幼稚園や保育所など集団生活を経験する3歳児は8割程度と多くなっている。また保育所においても、近年「気になる子ども」が注目されており、保育者への質問調査に基づいて必要な支援内容や支援体制を検討しようとする研究が報告されており、発達障害に関して認識が高まっている²⁾。

われわれは、保育と地域保健の連携により、集団生活における保育士による発達評価を3歳児健康診査時の情報として、活用できるシステムを構築したいと考えた。しかし、これまで発達障害スクリーニングの情報として、3歳児の集団生活における発達評価を検討した研究は報告がなかった。そこで、われわれはシステム構築の前段階として、保育士が集団生活に適應困難な3歳児をどのように発達評価しているかを明らかにするために、チェックリスト「3歳児発達調査票」を用いて試行的調査を行った。保育士の判断にて「定型発達群（標準的な発達と判断した子ども）」、「サスペクト群（集団での適應行動などの発達が気になる子ども）」に分類し、保育士による集団生活での3歳児発達評価を試みた。

II. 研究方法

1. 対象

事前手続きとして、A市保健福祉部と共同研究とすることを協議し、行政的な手続きのうえ個人情報守秘義務については配慮を行った。

対象はA市立保育所11の3歳児クラスに在籍している3歳児205名とした。実施時期は年度の半ばの時期である10月とし、同学年の3歳児の平均的な年齢となるようにした。

2. 方法

1) 「3歳児発達調査票」の作成

われわれはDSM-IV、ICD-10の広汎性発達障害の診断基準、橋本らの先行研究を参考に社会的相互関係の障害に関する13問、コミュニケーションの質的障害に関する3問、想像力の障害（限定された情動的行動、興味、活動のパターン）に関する5問、認知行動に関する2問、生活習慣に関する2問などの25問からなり、4

表1 3歳児発達調査票

質問項目	
1	おとなしく手がかからない (社会性)
2	表情が乏しい、硬い (社会性)
3	一人にされても平気である (社会性)
4	人見知りをしない (社会性)
5	名前を呼んでも振り向くことが少ない (社会性)
6	視線が合いにくい、泳ぐ (社会性)
7	じっとしていない、多動である (社会性)
8	簡単な身の回りのことができない (生活習慣)
9	要求の指差しはするが、興味のあるものの指差しはしない (社会性)
10	一人遊びが多い (社会性)
11	言葉の遅れ、進歩が遅い (コミュニケーション)
12	こだわりがある、場面の切り替えが難しい (興味の限定・こだわり)
13	睡眠が不規則である (生活習慣)
14	他の子どもと同じ行動がとれない (社会性)
15	決まりきったことや興味のある質問以外に答えられない (コミュニケーション)
16	教えないのに文字、数字を覚えている (興味の限定)
17	ままごとなどのごっこ遊びをしない (コミュニケーション)
18	自分の思い通りにならないとかんしゃくを起こしやすく機嫌がなおりにくい (興味の限定)
19	注意しても聞き入れない (社会性)
20	運動がぎこちない (認知行動)
21	まねをして丸を描けない (社会性)
22	順番が待てない (社会性)
23	おもちゃの目的に合った遊び方ができない (興味の限定)
24	音、臭い、光、触れられることに過敏に反応する (認知)
25	気になる仕草や目つきをすることがある (限定された興味)

下線質問は親への質問と共通する

段階尺度で回答する「3歳児発達調査票」(表1)を作成した^{1,3,4)}。各回答は「ない」を0点、「稀にある」を1点、「時々ある」を2点、「しばしばある」を3点の4段階尺度で評点化した。

2) 調査

保育所3歳児クラス担当の保育士は担当児について各々「3歳児発達調査票」に記入した後、標準的な発達であると判断したものにはその旨を記載する。記入に際しては、複数で相談し、

判断することとした。市役所保健福祉部を通じて、調査票を各保育所に送付し、担任保育士が記入した後、市が全例回収し、記入漏れ等については問い合わせた。

3) 分析解析方法

- i) 回答点数総得点を5点の度数としてヒストグラムにて2群(定型発達・サスペクト群)について分布状況を比較した。
- ii) 総得点平均値について2群間で、マン・ホイットニーのU検定を用いて有意差を検討した。有意水準は5%以下とした。
- iii) 各質問の得点平均値を全質問について2群間で統計解析ソフトSPSS14.0(エス・ピー・エス株式会社)を用いて多変量解析を行い、比較検定した。有意水準はいずれも5%以下とした。

III. 結 果

1. 回答点の度数分布について

保育士の判断による「定型発達群」と「サスペクト群」は、それぞれ170名、35名であった。回答点数を5で度数分布すると、図1に示すように、「定型発達群」では、0～4が118と最も多く、5～9が34、10～14が10と激減した。「サ

スペクト群」では0～9では、1と出現が少なく、15～24で19と高得点で多く出現していた。15点を中心にして両群で分布状況が異なっていた。

2. 総得点平均値について

「定型発達群」では平均点3.959, 標準偏差5.401, 最小値0, 最大値35, 「サスペクト群」では平均点27.429, 標準偏差14.775, 最小値2, 最大値65であった。2群間において $p < 0.01$ で有意差を認めた(U=203.000, Z値=8.673)。

3. 各質問の回答点数平均値について

図2に示すように、2群間で有意差を認めなかったのは、質問1「おとなしく手がかからない」、質問4「人見知りをしない」の2問であった。他の23問, 社会的相互関係の障害に関する2, 3, 5, 6, 7, 9, 10, 14, 19, 21, 22の11問, コミュニケーションの質的障害に関する11, 15, 17の3問, 限定された常同的行動, 興味, 活動のパターンに関する12, 16, 18, 23, 25の5問, 認知行動に関する20, 24の2問, 生活習慣に関する8, 13の2問については2群間で有意差を認めた。

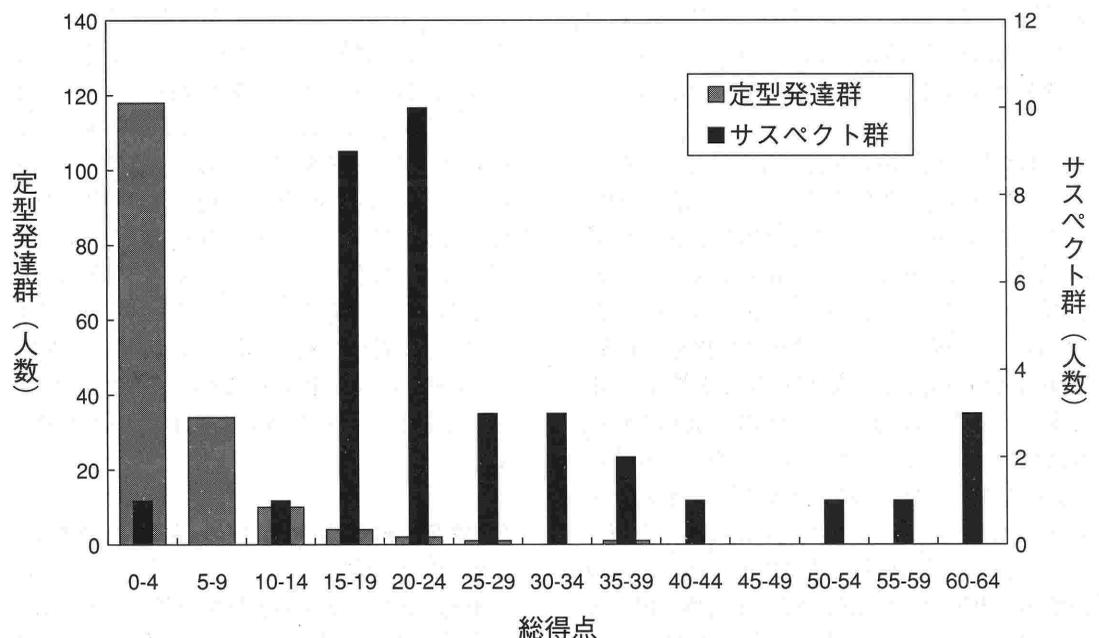


図1 保育士評価総得点分布

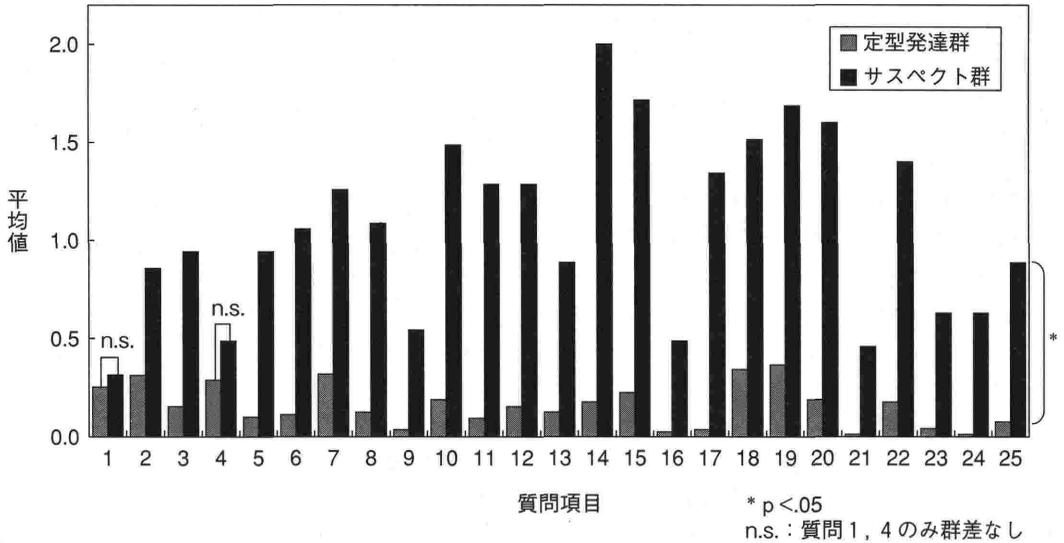


図2 各質問項目における回答の平均値

IV. 考 察

1. 「3歳児発達調査票」について

発達障害の徴候は家庭の中では目立たず、集団生活を開始して明らかになってくることが多い。小枝らは注意欠陥多動性障害、学習障害、および言語発達のよい広汎性発達障害は3歳児健康診査までの乳幼児健診では、発達上の問題を指摘されていないことが多く、落ち着きのなさや特異的な認知障害、対人関係の障害などは乳幼児期には発見されにくかったと報告している⁵⁾。

われわれは質問項目を検討するために、保育士による3歳児の集団生活における発達評価を橋本らの親評価による発達障害群と健常児群の臨床的検討と比較した⁴⁾。表1に示すように、質問1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10, 11, 12, 13, 17, 18, 24, 25などは共通する質問である。親評価にのみ有意差の認められた質問は1, 4であり、保育士評価にのみ有意差の認められた質問は、24, 25であった。他は、両方で有意差が認められ、家庭と保育所共通で気づかれやすい内容と思われた。質問1「おとなしく手がかららない」、質問4「人見知りをしない」については、出現時期が乳児期であるため、親のほうが気づきやすいと考えられる。質問24「音、臭いなどに過敏に反応する」、質問25「気にな

る仕草や目つきをすることがある」については、やはり集団の中で、他児と比較してはじめてはっきりするため、保育士のほうが気づきやすいと考えられる。

保育士用のみの設定質問のうち、「他の子どもと同じ行動が取れない」、「注意しても聞き入れない」、「順番が待てない」、「決まりきったことや興味のあること以外の質問に答えられない」、「教えないのに文字、数字を覚えている」、「おもちゃの目的に合った遊び方ができない」、「運動がぎこちない」、「簡単な身の回りのことができない」などは、すべて2群間で有意差を認めた。これらの質問は評価のためには集団の中で、他の同年齢児との比較や対人交流の様子の観察が必要である。家庭の中でわが子のみ見ている親には判断が難しく、保育士が最も的確に把握できると考えられる。したがって、この「3歳児発達調査票」を保育士が記入した場合、親への問診からは得られにくい集団生活の中の発達情報を把握できるのではないかと考える。

2. 保育と地域保健の連携による発達障害スクリーニングについて

地域における発達障害早期発見・介入システムを考えるうえで、保育所の存在は重要である。今回の調査結果より、「サスペクト群」は

17.1%であり、保育の現場では、適応困難など発達に気になると保育士が評価している子どもが多いことがわかった。近年、保育所において「気になる子ども」が注目され、平澤らは保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもは全在籍児の4.5%²⁾、西澤らは同様の該当児は12.1%であったと報告した⁶⁾。平澤らは軽度発達障害児と「気になる・困っている行動を示す子ども」との関連についても検討し、該当児の76%は診断なしであったことから、従来障害児教育や福祉の対象とはならなかった軽度発達障害が含まれることを示唆した²⁾。保育の現場では、発達障害に対する早期発見や支援の問題は重要な課題となっていることがうかがわれる。

われわれは、共同研究者のA市に保育と地域保健の連携による発達障害スクリーニングシステムを提案している。それは、健診実施者であるA市より保護者へ「3歳児発達調査票」の入った通知を送付し、事前に保護者が保育士に記入を依頼し、健診時に保護者が記入済みのそれを持参するというものである。これにより、従来得られることの少なかった集団生活での発達評価情報を保護者同意のうえで直接的に得ることができるようにと考えられる。なお親の同意については、保護者が自らの意思で記入を保育士に依頼するため、同意を得られたと考える。A市では3歳児の約8割が保育所等で集団生活を体験するようになっているため、高率に保育所情報を把握することが可能となる。

発達障害は早期発見が重要とされている。早期診断・介入が行われ、適切な対応、支援、環境調整などが行われた場合、子どもは安定し、問題行動は減少し、予後は改善すると報告されている⁷⁾。しかし、特に軽度発達障害は、一回の診察や、健診場面において、診断の確定は困難な場合が多い⁸⁾。Hondaらは、横浜市の早期発見早期介入システムにおいて、親への問診や、保健師の家庭訪問などで情報収集し、集団の中での同年齢児との交流の様子を行動観察しながら、時間をかけて診断あるいは介入につなげ、遅くとも3歳後半には、診断が確定することを報告している⁹⁾。優れたシステムであるが、集団での発達評価はグループ指導時の行動観察な

どにより把握するしかなく、保育所から直接的に得ることはできない。

今回の調査は、集団生活のなかで適応困難な3歳児を保育士はどのように発達評価しているか、またその情報を3歳児健診における発達障害スクリーニングの情報として得ることは可能かという観点で、予備的調査として実施した。そのため、3歳児健診の結果と照合することや、臨床的に検証することはできない。それについては、今後研究を進めたいと考えている。

V. 結 語

「3歳児発達調査票」を用いて、集団生活における3歳児の発達評価を検討し、スクリーニングツールとして活用可能かという視点で検討を行った。従来得られることの少なかった3歳児の集団生活の中での適応状況を得ることができ、早期発見のための情報となるのではないかと考えられた。さらに、3歳児健診において、地域保健と保育の連携を進め、発達障害に関する地域早期発見早期介入システムの構築について検討を進めたい。

この論文の内容は平成19年10月愛媛県松山市において行われた第66回日本公衆衛生学会にて発表した。

文 献

- 1) American Psychiatric Association. Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders. 4th edition (DSM-IV). Washington, DC: American Psychiatric Association, 1994.
- 2) 平澤紀子, 藤原義博, 山根正雄. 保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究—障害群からみた該当児の実態と保育者の対応および受けている支援から—。発達障害研究 2005; 26: (4): 256-267.
- 3) WHO (World Health Organization). The ICD-10 classification of mental and behavioral disorders. Diagnostic criteria for research. Geneva: WHO, 1993.
- 4) 橋本俊顕, 西村美緒, 森 健治, 他. 自閉性障害シンポジウム I: 発達障害の早期診断と早期介入について. 脳と発達 2005; 37: 124-129.
- 5) 小枝達也, 汐田まどか, 赤星進二郎, 他. 学習

- 障害児の実態に関する研究(第2報): 3歳児健診における学習障害リスク児はどんな学童になったか. 脳と発達 1995; 27: 461-465.
- 6) 西澤直子, 上田征三, 高橋 実. 保育所における「気になる子ども」の実態と支援の課題(1)—市内保育所の実態調査から—. 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集 2003; 745.
- 7) 杉山登志郎. 正常知能広汎性発達障害と精神科問題. 発達障害研究 1995; 17: 117-124.
- 8) 杉山登志郎. 軽度発達障害. 発達障害研究 2000; 21: (4): 241-251.
- 9) Honda H, Shimizu Y. Early intervention system for preschool children with autism in the community. Autism 2002; 6: 239-257.

[Summary]

For a pilot study for the screening of developmental disorders in cooperation between public health and nursing, we have studied a questionnaire survey for nursery teachers concerning three-year-old children's difficulties during nursery school. We designed a questionnaire to assess three-year-old

children. The questionnaire consisted of 25 items that were related to social interactions, communication, cognition, behavior, and daily habits, and each item was scored on a 0 to 3 scale. We used the questionnaire to investigate 205 three-year-old children in nursery school. The nursery teachers assessed their development and answered the questionnaire for all children. Our results revealed that, of the 205 children assessed, 170 were deemed normal and 35 were suspected of having developmental issues. These two groups displayed marked differences in terms of the score distribution. There were significant differences between the two groups in the total score, as well as the average score for each item, especially for items related to difficulties in "group behavior", "playing alone", and "one-sided communication".

[Key words]

developmental disorders, nursery teacher, group life, difficulties during nursery school life, three-year-old children